

【講 演】

紫式部、『源氏物語』への道一試練・覚醒・自己陶冶^{とうや}

京都学園大学教授 山本淳子

ただ今、御紹介にあずかりました山本淳子と申します。今日は「KYOのあけぼのフェスティバル2008」にお呼びいただきまして、皆様の熱気をととても感じています。どうぞこれからはばらくの間ですが、よろしくお願ひします。

今年は「源氏物語千年紀」ということで、あちこちで様々なイベントやパフォーマンスや展示が行われ、盛り上がっています。今日この京都テルサでも、全館で『源氏物語』の展示があるということを伺っています。源氏物語関係の人形や、イラストや、それからお香や、また様々な方々が源氏の文章をお書きになった筆も展示されると伺い、先程館内を拝見させていただきました。

源氏物語といえますと、古典の中では一番人気があり、しかもその底力を見せつけているのが今年ではないかと思ひます。また、源氏物語の作者といへば、紫式部です。今年は千年ぶりにあまりにも出番が多くなって、紫式部もびっくりしているのではないのでしょうか。ただ、紫式部と申しますと、源氏物語ほどには彼女自身に付いて細部を御存じないという方も多ひのではないのでしょうか。

私も学生から「先生、紫式部という人はどういう人だったのですか。」と聞かれます。「じゃ、どういう人だと思ひますか？」と、学生も勉強しているはずですので聞いてみますと、「私はとても怖い人だったのではないかと思ひます。」そう答える学生が多ひのです。自分の意見をハッキリ持っていてそれをビシッと言う、あるいは後輩を叱る。華やかだけれどみんなを叱る、そうするとみんなの背骨が伸びてついて行く、そういうタイプの人だったんでしよう。どうもそういうイメージが先行しているようです。

そこで今日「紫式部、『源氏物語』への道一試練・覚醒・自己陶冶」、この題名でお話をさせていたきたいと思ひます。

と申しますのも、最初から紫式部はこの源氏物語の作者であったわけではないのです。人生のある時期にこれを書いたのですが、幼い時から、源氏物語が書けるような人生観を深く持ち、人間洞察も鋭いそういう人間であったわけではないのです。彼女は試練、そして目覚めを経て人間が変わりました。

私は紫式部の研究者ですが、外側の客観的事実ではなく、紫式部はいったいどんな人で、何に悩み、何を考へて生きてきたのか。そして、源氏物語が書けるような人物にやがてなったのか。またその後も、何に悩み、人生で何に目覚め、何を目指し続けたのか、そういった紫式部の内側の心を勉強してきました。

今日は男女共同参画事業ということですが、自分を世の中に活かす、自分らしさというものに気がつき、それをつき詰めていったら、気がつくとも源氏物語を書いていた。そしてそれがみんなに読まれ、千年経ったらこんなにホールにたくさんの方がお集まりになり、千年紀のイベントも行われるような「あら私、世界の偉人になっていた！」という、紫式部の足跡を皆様にお聞きいたきたいと思ひます。

I 「世」と「身」と「心」

—〈現実〉と〈私〉

まず一つ目「世と身と心」というテーマを挙げました。これらは現代語でもよく使う言葉です。「この世とあの世」「サラリーマンの身はつらいよ」なども言ひます。「心」も、日常語といつてもよい言葉です。

これらの言葉は、勿論平安時代でもありふれた常に使われた言葉です。しかし、紫式部がこれらの言葉の本当の意味に気がつくまで、20代半ばまでの月日が必要でした。まず最初に、これらの言葉の意味を少し考えてみます。

真ん中の「身」という言葉から考えていきます。「身」というとまず思い浮かべますが、「身体」（からだ）ということです。身をつねると痛い、打ち身などの身などと申します。身体というのは痛かったり、病気になったり、もちろん寿命があつたりします。それから例えば、身長的身というのも「身」です。私は小柄ですが、この身長を急に175センチにしたい、そしてミスユニバースに出たいと思っても、整形で顔はちょっと変えられますが、身長を伸ばすことは唐突にはできません。

というわけで、身体というのは私たちにとって変えることができないもの。つまり現実を受け入れなくてはいけない「自分自身」です。

そのことを考えますと、身体だけではありません。例えば「サラリーマンの身はつらいよ」「主婦の身もいろいろあるのよ」というような「身」。これは、私たちが身を置いている事情です。自分が今、世の中でどういった立場にあるのか。それが「サラリーマンの身」「主婦の身」あるいは「男の身」「女の身」。「女の身でこんなことをするのはねえ、世の中からの風当たりもあるのよ。」というように、現実をそれをしてはいけないけれど、いろんな逆風をいっぱい受けることもある、そんなことを含めた「身」です。そういえば身の上相談という言葉などが、これに一番当てはまるかもしれません。それからこの「身」と申しますのは、人間関係の中における身。例えば夫がいて「妻の身」である。つまり今まで申しました身体、それから世間の中での立場、そして人間関係の中での立場。皆、現実を生きる中で、避けることのできない様々な事情を背負った私たち自身です。

ところで、その一つ上の「世」というのは何でしょう。世界の「世」です。それから世間の

「世」、「昭和の世」「平成の世」などと申します。私は昭和に生まれ、現在平成の世を生きています。私が急に平安の世に飛んで行きたいと思ってもできません。つまり「世」というのは、ある時代を指す時には、私が現実に生きている時代ということを指します。

また、例えば私が大学の教員として大学という世間を生きている。周りにはたくさん大学教授の先生方がいて、学生がいて、学生の悩みを聞いたり授業をしたり、入学試験があるなど、そういった大学の世間というものがあります。

この世間は私を取り巻いていて、私一人の力ではなかなか変えることのできない現実社会です。また、平安時代には「世」という言葉で、例えば「男女の世」のように愛情関係、あるいはまた、自分が身を置いている親戚関係という世などを指すこともありました。

つまり「世」というのは、先程「身」が現実を生きている私だと申しましたが、それを取り囲み私たちに縛っている現実そのものです。ですから、この「世」と「身」は、私たちが現在使う時でも、今ひとつ楽しいニュアンスでは使われないのです。「ああ、サラリーマンの世はつらいよ。だからこの身は疲れちゃうんだ。」というふうなニュアンスで使うことが多いのです。それは平安時代でも同じでした。

一方「心」です。私たちは「心が疲れた」という時にも使いますが、「心が元気になる」「心が励まされる」「心が温かくなる」などの意味でも使います。

「身」はいつも現実に縛られています。しかし、目の前に様々なつらいこと、哀しいことがあっても、心は自由に、例えば夢を見ることができます。あるいは明日への希望を抱くことができます。つまり「心」は、私たちが成り立たせる大切な要素であり、しかも現実に縛られない、とても自由な部分を「心」と言うのです。

さて、紫式部がこの「世」と「身」という現実、そして現実の「私」。このことに気がつき、でも私にはそんなつらい部分だけではない、心

があるんだという「私」に気がついた。そして彼女は源氏物語の作者になるのですが、それまでには彼女の人生の足跡がありました。

これ以降は、紫式部の和歌を読んでくことになります。これらの和歌はすべて『紫式部集』という作品に収められています。紫式部という一番有名なのは、やはり『源氏物語』。そして、その次に御存じとすれば『紫式部日記』でしょう。

しかし、源氏物語はフィクションで、あくまでも光源氏が主人公のお話です。この中に、紫式部自身は登場しません。一方紫式部日記は彼女のお勤め先日記であって、あくまでも現在のOLのような宮仕えをした人物が、その職場の人間としての立場から、世の中や自分の身の回りや、そして自分自身を見つめたものです。

一方、この紫式部集はほとんど知られていませんが、彼女自身が自分の人生を最晩年に振り返り、今までいろいろ詠んできた和歌を一つ全集にしてみようと思って集めたものです。

当時の人々はよく和歌を書きました。そして手紙の最後に付けたりします。現在は、中学生、高校生、大学生のみならず、皆さんもとても便利ですから、メールで「お元気ですか」「お忙しいですか」と交わされる。日に2通も3通も交わされるという方も少なくないと思います。

平安時代の女性たちもこのように手紙を交わしていました。そして手紙には用件だけでなく、最後に和歌を付けるということをお洒落としていました。ですから、紫式部も人生の中でおそらく何百、何千という和歌を詠んだはずです。

ところが、現在残っている紫式部集を見ても、110ちょっとの歌しか集められていません。これは紫式部自身が自分の人生の中で大切だったという思い出になる歌を、若い時の歌から順番に並べた。選び抜いたエッセンスの歌百十幾つを編集したものです。

ですからこの歌をたどりますと、彼女が若かった時から晩年に至るまで、どういう気持ちで和歌を作り、あるいはどういう人間関係でど

な人に歌を送ったか、その歌がどのように彼女の思い出に残ったかということがわかります。つまり、紫式部集は紫式部自身による歌の自叙伝といってもよいのです。

①娘・妻時代の紫式部

女友達との友情

それではまず最初に、紫式部集の一番最初に置かれた歌。『百人一首』にも入っている、紫式部の最も有名な和歌になります。

巡り合ひて 見しやそれとも わかぬ間に
雲隠れにし 夜半の月かな

私はこの歌を読んだ時、これは完全に恋の歌だと思っていました。素敵な人と巡り逢った。この人が一生の私の恋人かどうかよくわからない間に、彼はドローンと雲に隠れる月のように姿を消してしまった。私の初恋は結局、短く終わってしまった。そういう話と思い込んでいたのです。しかし、そうではないのです。

実は、紫式部集を読みますと、この歌は幼友達の間で交わした手紙に付けた歌だと書いてあります。詞書にはとても幼い時からの童友達と書いてありますが、その友達に長い時間を経てバツタリ巡り逢った。つまり紫式部はこの頃父親が国司階級と申しまして、現在の知事のような仕事をしていました。これは中央官庁に勤めているのではなく、地方に飛び、例えば越前国守、それから淡路国守と、日本中のいろいろな国を治める、地方官のトップとなるということです。現在知事は選挙ですが、当時は天皇から任命され都からそれぞれの国に飛んだわけです。紫式部の父もこの階級でした。霞ヶ関国家公務員に例えると、課長さんぐらいのレベルです。その人たちが地方に行くのです。

さて、このお友達も父親が同じように国司をしていたので、全国を転勤族で巡っていました。たまたま父親が都に勤めていた時に幼なじみになったけれど、地方へ行くと4年間は都に帰れない。そんなわけで彼女と、大人になってから

バッタリ出会った。だいたい紫式部が20歳を過ぎた頃と考えられます。

「あなたなの？小さい時と顔立ちが変わっちゃったから、よくわからないわね、お互いに。」と言いながら盛り上がっていた。ところがお友達も若い娘さんですので「ごめんなさい、長くは居られないの。私、家にかえらなきゃ。」と、雲に隠れる月のようにドローンと夜中過ぎに家に帰ってしまった。

紫式部はもっとお話をしたかった。それで彼女に手紙を書いて「今日は残念だったわ。」というわけです。「久しぶりにバッタリ会ったあなた。それがほんとにあの小さかったあなたなのかどうか、ちっとも見分けのつかない間に、急いで帰ってしまったね。そう、雲に隠れる月のように。」「残念、また会いたいわ。今度また会いましょう。」という手紙の最後にこの歌を付けたのでしょう。これが紫式部集の一番最初の歌です。

実はこの頃、自分の歌を自分で集めて和歌集を作ることは、そう珍しいことではありませんでした。しかし、それらの和歌集はどういう歌から始まっているのかというと、だいたいは春夏秋冬という順番で季節の歌ごとに集められています。ですから春の歌、例えば鶯が鳴いた、そういう体裁で始まることが多いのです。

また、一つは恋の歌から始まっています。『勅撰和歌集』『古今和歌集』など、国で、今でいう文部科学省推薦で作る和歌集が春夏秋冬の体裁で作られていて、そういった権威ある体裁にのっとったということですが、恋の歌から始めるというのは、自分の若かった時の思い出の歌から始めるということです。

しかし、紫式部集も若かった時の思い出の歌から始まりながら、恋の歌ではなくお友達の歌から始まる。これは私が調べる限り、平安時代の和歌集では唯一です。つまり他の歌人は、人間は恋をして一人前の歌が詠めると思っていた。しかし紫式部にとっては、恋よりも先に友達との友情が大切だったわけです。友達は彼女にと

ってかけがえのない人でした。紫式部はこの少し前にお姉さんを亡くしています。一方、このバッタリ会った友達は「あら、そうなの。私は妹を亡くしたの。」「そうなの、お互い寂しいわね。それじゃ亡くしたお姉さんの代わりに、妹の代わりに思い合いましょう。」と、この後も文通を続けていきます。

亡くなった人の身代わり、どうしても会うことのできない人の身代わりに、今近くにいて愛せる人を愛する、そして心を慰める。これは源氏物語です。桐壺の帝というのが光源氏の父親ですが、彼は桐壺の更衣という自分のお姫様を一心に愛します。ところが、桐壺の更衣は光源氏を生んで彼が3歳の時に、いじめられ、ストレスが重なって亡くなってしまいます。夫は妻を失ってしまうという事態に陥り、どうしても彼女を失った哀しみから抜けられないとっていた時に、妻にそっくりな新しい妻が現れた。そうすると、彼の心は哀しみを決して忘れることはないけれど、なんとなく癒やされるようであった。これもまた人間の哀れ、ものあわれであることよ、と紫式部は書いています。つまり、自分がもう会えなくなった、亡くなってしまった、その人を思い続けながらも生きていかなくはならない人間である時に、新しく仲良くしてくれる人、愛せる人を見つけて、そしていつの間にか、また明日を生きていけるようになる。これは紫式部がこのお友達から学んだこと。ですからこの友達との出会いが人生の第一歩であった。そういう彼女の心がここに表われています。

恋へのあこがれ

さて、紫式部はこのように友達とお付き合いの中で人生の第一歩を踏み出しますが、他には、ほのかな恋への憧れもありました。

ほととぎす 声待つほどは 片岡の

森の雫に 立ちや濡れまし

これは5月にホトトギスの声を聞きに行った時の歌だと、紫式部集に書かれています。上賀

茂神社のようです。現在上賀茂神社に行きますと、この歌の立て札が立っています。5月になりますと、春、鶯の声を待つように、都人はホトトギスの声を心待ちにいたしました。当時の5月は今の6月。そろそろ夏に差し掛かったという季節感が自分で実感できるわけです。ホトトギスは里山、人々も住んでいるが小高い丘や、あるいは森、山などにいます。そしてまた、朝早くまだ暗い間に鳴くのです。

私は大学が左京区の吉田辺りでしたが、吉田山ではホトトギスが鳴きます。それは朝早くでなくても結構鳴いていましたが、どういう声かと申しますと、「タタタタタッ、ホーホーホー」。最初の「タタタタタッ」は切り裂くように鳴きます。そしてその後が「ホーホーホー」とささやくように。とてもメロディがいっぱいという感じの鳴き方なのですぐわかるのです。

吉田辺りではお昼でも鳴いていましたが、都人はいろいろホトトギスの鳴きそうな所に明け方から訪ねて行って、「私は今日、一番にホトトギスの声を聞いたのよ」と自慢することを、季節の風物詩にしていました。そして、紫式部もたぶん姉妹や父親などと、この時、上賀茂神社辺りの片岡の森にホトトギスを聞きに行ったのです。

さて、歌の意味です。

ホトトギスの声を待つ間、この賀茂神社の片岡の森に立って朝露に足を濡らしていようかしら。私には恋人はいないもの。

私に恋人がないという一節は和歌の中にはありません。和歌は「森のしづくに立って足を濡らそうかしら。」でお終いですが、「彼がいけないもの」という意味を付け加えたのは、この歌には本歌があるからです。万葉集の清冽（せいれつ）な恋の歌です。

足引きの 山の雫に 妹待つと

我立ち濡れぬ 山の雫に

これは大津皇子という親王が、彼女を待って詠んだ歌です。

山の露の中、君を待って僕は立ちつくし、足

が濡れちゃったよ、山の露にね。

彼はデートの約束をしています。そしてたぶん早朝なのでしょう。平安時代はデートは夜。しかも室内です。女性は外に出ません。そしてひたすら彼を待っています。一方平安時代から遡ること百年、奈良時代は恋は郊外です。開放的です。そして待ち合わせをして、このような山の中で彼は待った。そこに彼女も草の露に足を濡らしながらやって来る。これが古代・奈良時代のデートでした。

この時彼女がやって来るわけですが、「僕は足を濡らしちゃったよ。冷たいが我慢して君を待っていたんだ。」というこの歌に対して、「あなたの足を濡らしたその露に私、なりたいわ。」ほんとに可愛らしい歌ですよ。それと共に「あなたにいつまでもくっついていたい。」という彼女の可愛らしい愛の気持ちでもあるのですが、こうした奈良時代の万葉集の清冽な恋の歌を下敷きにして「大津皇子と彼女は山の露、山のしづく」という歌を詠んだ。そして私も待って足を濡らしている。だけど私は彼をまつのではないの、ホトトギスなのよね。まあ、彼いない歴何年の私としてはホトトギスを待つしかないわ。」という、そういった恋に憧れつつ、彼がいけないという歌です。

紫式部は20歳を過ぎるまで結婚することがなかったと考えられています。それには理由があり、父親になかなか仕事になかったからです。当時父親は国家公務員でした。国家公務員になると、勤め始めると基本給がもらえますが、基本給にプラスして現在の役職給、手当と言いますか、例えば「何処何処の守」という国司になるともらえる。これが大きいのです。でも、紫式部の父親は少し処世術のへたな人で、なかなか国家公務員として基本的に勤める以外、仕事してもらえなかった。10年間いわば鳴かず飛ばず窓際族のような失業状態が続いたわけです。食べられないことはない。が、あんな人の娘と結婚しても何にも良いことはないよと言われ続け、紫式部には結婚の口がなかった。しかし彼

女は、このように友達と楽しくお付き合いしつつ、お出かけもしつつ、娘時代を送っていた。

その彼女が都という、故郷、友達、家族という小さな世界から外に出たのは越前国でした。そして越前国には恋が待っていました。でも、それは越前の人と恋をしたというわけではありません。春先に越前へ都から手紙が来た。そして、それが恋文でした。彼女に恋文を送ってきたのは、なんと父親ぐらい年齢の離れた男性からでした。20歳から30歳ぐらい離れていたと言われていますが、父親の同僚だったこともある人物です。紫式部と推定年齢がほぼ同じ息子がいます。

ところがこの人はとても面白い人でした。最初に送ってきた手紙は、越前ですから豪雪で冬の間は手紙が送れないのです。ですから手紙を送ることができるのは、ようやく春になってからということになります。そこで、手紙には春には溶けるもの、と書いてありました。なぜなのでしょう。春には溶けるもの。何が溶けるのでしょうか。雪が溶けます。だから手紙が送れるようになった。氷が溶けます。暖かくなる。そして、とても冷淡だった君の心もとけると。これは、春だから君は僕を好きになるということです。「30も年上の、40か50過ぎのオジサンが「君は僕を好きになる」って、何なんだッ。」てことです。そこで紫式部は肘鉄を食らわす歌を送りました。

春なれど 白嶺のみゆき いやつもり

私がいるのは越前よ、そしてそこには白山がある。春だけど白山の深雪、深い雪はまだまだ積もっているのよ。

解くべきほどの いつとなきかな

解ける時なんかいつかわからないの。お生憎さま、私はまだまだ冷淡です、という歌です。

しかし、歌を贈り返すということは脈があるということです。それで彼との恋が始まりました。

さらにこの人は面白い人で、ある時は手紙を書いて、お習字を直す時に使う朱をポトポトと

滴のように落としてありました。そして、僕の涙の色だ、というふうに書いてあるのです。君が冷たいものだから、僕は泣いて泣いて、そして涙が枯れてもう血が出ちゃったよ。想像してみるとちょっと怖いですね。それをビジュアル的に手紙にポトッ、ポトッと滴を落として送ってきた。

それに対して紫式部の返事は、「こんな朱色なんかダメ。だって、朱色ってすぐ色が褪せるでしょう。」確かにそうですよね。屋外の看板など見ましても、赤色の字だけ消えていたりします。意味が通じなくなって青色の字だけ残っていたりします。「赤色はすぐに褪せてしまう色。だからあなたの色、つまりあなたの心が誰かに移ったり消えたりしてしまうってことでしょう。そういうのはダメ。」ということは、ずっと好きでいてほしいということです。この返事を送った時には、紫式部の心は彼に向かって解けて流れ出していました。

夫の愛情

紫式部は京都に戻って彼と結婚するわけですが、その時に彼が詠んでくれたのが次です。

峰寒み 岩間凍れる 谷川の

行く末しもぞ 深くなるらん

山の頂上はとっても寒くって、岩の間では溪流は凍りついているんだ。その谷川もどンドン下流、行く末に行くに従って、最初は浅くて凍ってるが、深くなるだろう。君と僕も同じだ。最初の白山の雪は凍りついている という歌です。最初、君はお堅くて、僕に対して冷たかったね。でも僕たちは結ばれた。これからは夫婦だ。行く末遠く深い契りで結ばれていくのだよ。これが彼の結婚の時の歌です。なかなか素敵な人ではありませんか。

この人のことを考える時には、いつも頭に浮かぶ人がいて、それは明石家さんまさんですが、あの人も50過ぎですが、口から先に生まれたような、そしてとても女性にモテるのですよね。

一緒にいると楽しくなるようなタイプですよ。

そうかと思うと、ちょっと素敵言葉もささやいてくれそうな、そういうイメージがあって、まあ顔立ちも悪くはない。しかも動きがとても活発で、この紫式部の夫というのも実はスポーツ系でもある人です。現在の葵祭に借り出されて、50過ぎまで舞人をやっていた。

先程、蘭陵王(らんりょうおう)が出てまいりましたが、蘭陵王がどうして怖いお面を被っているのかと申しますと、蘭陵王という中国の王はすごくハンサムで甘い顔立ちでした。そのままの素顔では戦場に行くと、「ああ、素敵蘭陵王様」と言って皆が戦意を喪失してしまい、戦いにならないのです。もちろん相手もヘナヘナとなってしまいますが、こちらもヘナヘナしていますので、勝ちにも負けにもならないということで、顔を隠して彼は戦いに挑んだ。皆が普通に戦って、こちらの実力が出て戦果を上げたという、そういう伝説を元にした舞です。

当時、舞人というのはとても珍重されまして、いろいろな所に借り出されました。この紫式部の夫も亡くなるちょっと前に、そういった舞人を務めています。

しかし、彼はなんと、「行く末遠く結婚するんだよ、深い間柄になるんだよ。」と言ったのに、そのたった3年後に亡くなってしまいます。夫が亡くなった。しかし彼には本妻がいました。当時、男性はたくさんの通い所、妻を持つことが世間的に許されていますが、一緒に住んでいる、おそらく長男を生んだ妻であろうと思われています。

②夫の死

泣くばかりの日々

紫式部は自分の実家に居て、夫を待つ身でした。そしてたぶん、あの人最近来ないわということになった頃、夫の妻から手紙が届いたのでしょう。その頃は非常に流行病が都を襲っていましたから、きっとそれで亡くなったのだろう

と思われています。紫式部には女の子が一人でした。あっけない夫の死。紫式部はこの後、涙にくれるばかりの日々を過ごすことになります。その時の歌です。

消えぬ間の 身をも知る知る 朝顔の

露と争ふ 世を嘆くかな

「身」も出てきました。「世」も出てきました。これが最初に申しました現実ということです。消えぬ間の身、消えぬ間だけの儂いもの。朝顔の露と争う世。この「世」というのは夫を縛り付けていた現実、夫の寿命のことです。

夫は朝咲くとすぐに萎んでしまう、儂い朝顔の、さらにその上に降りて数時間で消えてしまう、蒸発してしまう露、それと先を争うように亡くなってしまった。なんと儂い彼の人生だったことか。これが彼の運命だったんだ。私だってそれはいつ死ぬかわからないってことはわかっている、でも今日は自分のことはさておき、あの夫の儂い運命を泣かざるをえない、泣かすにはいられないの、というのがこの歌です。

理屈では人生なんて何時死ぬかわからない、そういうことはわかっている。当時、仏教の信仰が盛んで、そういうことはいつも聞くことです。しかし、それは通り一遍のお説教として聞くこと。どんなにわかっている、今は彼が死んだということに泣かすにはいられないのです。

こうして紫式部は初めて「身」「世」ということを知ることになります。紫式部の人生で、20歳を過ぎて結婚して子どもを生んで夫に死に別れるまで、「身」など、「世」などという、ありふれた言葉を和歌に詠まなかったことがあるとは到底思えませんし、当時でもそれぐらい常に使う言葉です。

しかし、紫式部集をめくりますと、こうして深刻に現実という意味で使われているのは、この時が初めてです。ですから紫式部はこの言葉を夫が死んだというところで初めて使うことによって、私たちに現実の過酷さを告げています。

私は現実を知らないでぬくぬくと生きてきた。普通の娘であり、故郷に包まれ、そして家族と

一緒に生き、結婚してからは夫と娘と一緒に楽しく生きてきた。その時には人生を知っているつもりでも、現実を本当に知っているわけではない。今、初めてこうした試練にあって、現実の過酷さということが、ようやくしみじみわかったのだと。

我が子への思い

さて、紫式部はそうした泣いてばかりの生活を送っているわけにはいきません。なぜならば娘を抱えているからです。

若竹の 生ひ行く末を 祈るかな

この世を憂しと 厭ふものから

若竹のような我が子の将来を、私は祈らずにはいられない。自分自身はこんな人生など、もう嫌気が差しているというのに。

またこの歌にも「この世を憂し」と出てきました。「この世」これは紫式部自身の人生のことです。この歌を詠んだ時、紫式部の娘がまだ赤ちゃんですが、病気にかかっていました。熱でも出たのかもしれないのです。それで自分の召使いたちがお祈りをしている。紫式部も一心に祈らずにはいられない。この娘の将来がどうぞ健康で、そして行く末幸せでありますように。でも、気がついてみると自分はどうだったろうか。人生なんてこんなもの、人生なんてつまらないもの、ああ、もう辞められるものなら辞めたい。そう思っているけれど、それはさておき、娘は幸せに。

こうした気持ちも、夫と死に別れてから初めて、骨身にしみてわかるようになった。それが紫式部のこの頃の心境だった。ですから、紫式部は最初から人生観が透徹したというか、突き抜けた偉人のような人物ではありませんでした。こうやってぬくぬくと世間知らずだったお嬢さん、奥さんと、そして未亡人になって、目の前が真っ暗な日々を過ごしていた。その頃は普通の人間だったと見て良いでしょう。しかし、やがて彼女が目覚める時が来ます。それが「心」

との出会いです。

③〈私〉の発見

紫式部は、すごくつらかった、そして毎日泣いて暮らしていた。ところがある時、すごくつらいという度合いがさほどでもない。前よりは少し治まっているということに気がついた時がありました。

哀しみは決してゼロにはならない。先程ちょっと申しました、桐壺の帝が妻を亡くしてすごくつらかった。でもそれは決して消えないが、新しい妻を迎えてなんとなく癒やされるようであった。そのように紫式部も夫が亡くなったつらさは絶対に忘れないが、気がついたら笑っているという時がありました。その時に、笑う自分の心というものに気がついて詠んだ歌です。

数ならぬ 心に身をば 任せねど

身に従ふは 心なりけり

人の数にも入らぬような私。自分の現実が自分の思うように動いてくれるわけではない。夫は亡くなってしまった。私は未亡人である。父親は生活力がない。その状況、現実はまったく変わらない。ところが、絶望の苦しみは永遠に続くわけではなかった。現実の自分に従って、やがていつか静まってくれるのが心というものだった。私には現実に縛られてにっちもさっちも行かない自分だけではない、「自分」「心」というものがあつた。それで明日を目指していくことができる。この状況の中でも微笑んだり、娘と笑ったりすることができる、そういう気づきです。この時に、紫式部は初めて現実というものから解放されたのです。そして自分は明日に向かって歩き出せるということがわかりました。これだけではありませんでした。その心がいかに自由奔放なものかということにも気がついたので。心は今ある現実に従って笑ったりするだけでなく、明日自分は何をしようか、明日自分は何になろうか、あるいは現実にはありえないような夢を見ることができる。その心が、

源氏物語という現実にはあり得ない物語を創作したのです。このように物語を作れる心というのは、無限の可能性を持っているのです。

紫式部が先程の「数ならぬ」という心の発見と共に、連作として同じ時に二つ詠んだ歌です。

心だに いかなる身にか 適ふらん

思ひ知れども 思ひ知られず

「心だに」、その現実に従うといった心すら、私の身には「いかなる身にか適う」、いったいどんな現実という箱に収まるというものだろうか。現実には私をいろいろな所から縛る。でも私の心は、光源氏という人がいて、来てくれたら素敵かもしれない。そう言った妄想を抱いて少し幸せになってしまう、そういうことを書いてしまう。そう、私の心は現実に納まりきらない。現実にはわかっているのだが、辞めようと思っても辞められないのよ、というのがこの歌です。

こうして紫式部は、現実に縛られている自分を重々承知の上、それを受け入れた上で、自分の心を生きていくという人間になるのです。

ですから、ここからが物語作家、フィクションを作って私たちにも読ませてくれる、紫式部の誕生ということになります。

ここで少しまとめました。

受け身の人生→試練→覚醒→自己の人生追求

紫式部は与えられた受け身の人生を歩いていました。これが娘時代。そして妻時代は不満はあったかもしれませんが、永遠にこういった状態が続くと思って生きていた。ところが、夫が亡くなるという試練を受けた。夫が亡くなるというのは数ある試練のうちの一つかもしれませんが。でも、彼女にとっては大きな試練だった。しかし、その時に泣いて泣いて涙を枯らした後に、自分というものに気がついたのです。どんな辛さの中でも、心はついてきてくれる。そしてまた、その心は飛び立つこともできる。これが私なのだ。ここからは自己の人生、自分らしい人生を追求していこうということになります。

Ⅱ 社会の中で生きる

－かけがえのない「私」として

この後、紫式部の人生が変わって、お勤めに出るという後半になります。

紫式部は主婦、そして未亡人として源氏物語を書き始めたわけですが、その数年後と思われまます。思いがけなくもスカウトされ、現在の皇后陛下、当時の天皇のお后である彰子様のところにお仕えすることになります。これは紫式部にとって驚いたことであつたでしょう。それまで仕えたことがない、お勤めしたことがなかった。それが世間の風に触れるということになるわけですから。源氏物語が、当時口コミで評判になっていた。そのことからのスカウトだと思われるのですが、具体的に内幕を申しますと、彰子様の父親が当時の最高権力者・藤原道長という有名な人物です。

この世をば 我が世とぞ思う 望月の

欠けたることも なしと思えば

この世はわしの世の中だ。見ろ、望月（満月）はどこも欠けたところがないではないか、このように世の中は100パーセントわしのものだ。と豪語したという人物ですが、この時は実はまだ、豪語には至っていないのです。豪語できるようになったのは、紫式部が仕えだしてから10年を経た頃、藤原道長の孫・彰子が生んだ子どもが天皇になるという事態が起こった後でした。

でもこの時は、道長の孫、彰子の子どもはまだ生まれていないのです。道長はなんとかして自分の娘に自分の血を分けた孫、そして天皇の跡継ぎを生んでほしいと思っていた。しかし、

娘はなかなか子どもを生んでくれない。そういえば、娘の夫である一条天皇には、前には定子さまという中宮がいたではないか。この時には定子はもう亡くなっています。でもあの方のところには清少納言が仕えていた。彼女も定子が亡くなりましたから、もう辞めています。あの人は『枕草子』というのを書いていた。一条天皇はもしかしたらああいう文才のある雰囲気が好きなのかもしれない。自分の娘のところにはそういう人がいない。そんな有名な物語や和歌や随筆を書いてくれるような侍女がいたらいいな、そう思っていたようです。

その矢先です。道長の妻、この人物がなんと紫式部の遠縁、又従姉妹に当たるのです。又従姉妹の家柄は良かった。親戚ですが、向こうは藤原道長という天下人の妻に、そしてこちらは子どもを一人抱えた未亡人で、貧乏な貴族の娘。明日どうやって食べるのか、心細さに迷っている。たぶん、この紫式部の又従姉妹に当たる道長の奥さんのところに源氏物語が行っていたのだと思います。「あなた、私の又従姉妹だけけど、こんな面白い物語を書いているのよ。この子を彰子に仕えさせたらどう？実はね、生活が苦しいらしいのよ。」「素晴らしい、これは良いな。」と、そういうわけだろうと思います。

紫式部にとっては道長とコネを作っておけば自分と娘、それから父親や弟の将来を確保できるかもしれない。願ったり叶ったりということで、お勤めに出た。ところが同僚が誰も口を利いてくれないのです。紫式部は源氏物語をひっさげの堂々の登場だと、もしかしたら自分では思っていたかもしれませんが。ところが「こんにちは、新人です。よろしくお願ひします。」と言っても、「あっ、そう」てなものです。紫式部は本当につらい気持ちになってしまいます。

12月の29日が初出勤でした。この頃は天晦日が30日で、1日ぐらいまではお勤めしたようですが、その後家に逃げ帰ってしまいます。「どうしたの。お正月はいろいろイベントなどあるから出てきなさい。」と言われても、「嫌で

す。」と、引きこもりになってしまうのです。なんとこの後、紫式部集を見ますと半年間、5月半ば辺りまで引きこもっています。「出てこい、出てこいと言われても、誰も私に声を掛けてくれない。あんな怖いところは嫌です。」と言って、紫式部は縮こまって家で泣き暮らす状態を5ヶ月も6ヶ月も続けた。ようよう呆れ果てた同僚が「わかった、わかった。歓待してあげるから出てきてください。」というふうに手紙を書いて、紫式部は復帰することができた。これが散々な紫式部の最初のお勤めだったわけです。

なぜ声を掛けてもらえなかったか、総スカンであったのかというのを、やがて紫式部は知ることになります。ここから皆様には紫式部の日記、お勤め先で書いた宮仕え日記回顧録である、紫式部日記をお読みいただくことになります。

①偏見に対して…心を閉ざさず、自分と周囲をすり合わせる

紫式部は偏見を持たれていたのです。それに対して紫式部はどう振る舞ったかというところ、紫式部は職場に復帰してから、前みたいにいろいろな人からバッシングを受けたらつらいので、話かけられても「さあ、私何もわかりませんの。」「そういうことは存じませんわ、さあ。」というふうにしました。聞かれたことにはわかることもありましたが「さあ」ばかり言っていた。そうしたところ、やがて周りの女房、つまり侍女たちが紫式部に言ったのが、この言葉です。

「かうは推し量らざりき」

あなたがこんな人なんて思っても見ませんでしたわ。

「いと艶に恥づかしく、人に見えにくげに、そばそばしきさまして、物語好み、よしめき、歌がちに、人を人とも思はず、ねたげに、見おとさむものとなむ、みな人々いひ思ひつつにくみしを」

「紫式部さんて気取り屋で、人を気後れさせて、

近づきにくくてよそよそしくて、物語が好きで才女ぶって、何かにつけて歌を詠み、人のことを人とも思わず、憎らしげに見下す人だ。そんな人に決まっているって、みんなして思いもし、言いもして、あなたが来る前からあなたのことを嫌っていたの。」ひどいです。会ったこともないのに。源氏物語を書いた才女なんて鼻持ちならない人に決まっているわよ、おお怖いってことですよね。

まあ、そういうイメージがあると思います。小説家、あるいは評論家などにはテレビなどに出て、コテンパンにいろいろ人のことを叱ったりしている人がいますが、会ってみたら怖いだろうなってイメージがありますよね。源氏物語には非常に教養高い言葉があふれていますので、こんなことを知っている人ってきっと冷たい人よ、そしてそれをひけらかすのよ、私たちなんかこの人から見下されるわよ、おお怖い。もう、おお怖い連続だったと思います。

それで侍女たちは、紫式部が来ても話しかけたら怖いわよ、だからこの人に私たちが和気あいあいとするのやめちゃいましょう。ねえ。と。要するに自己防衛戦を張っていた。傷つかないように、自分たちで自分たちを守ろうとしていたというわけです。

紫式部は全然こんな人物ではありません。お勤めしたことはないし、友達や夫や娘に育まれて、どちらかというと世間知らずにやって来た。でも、その心が豊かだったというだけの人です。ですからおずおずして泣きそうになりながらお勤めに出て「あのう」など言ったら、「知りません。」てわけですよ。だからもう涙にくれて家に帰って引きこもってしまった。ああ、自分はこう思われていたのか、初めてそれがわかりました。

あなたのことを見ると、
「見るには、あやしきまでおいらかに、こと人かとなむおぼゆる」

あなたったら不思議なほどおっとりしてしまふもの、別人かと思ったわ、とみんなが口を揃

えて言った。ああなんと恐ろしいことよ、こんな偏見を抱かれていた。さあどうしましょう。というわけです。おっとりした人と言われていたが、これはまだ自分の本質を知られているわけではないのです。今、自分は演技をしていたわけです。「知らないです」「さあ、なににんでしょう」知っていることもあったけれど、それを出さないでいただけです。でも、そうしていたら、あなたはとっってもおっとりしていると言われた。「そうか、これなんだ」というわけです。

藤原道長から自分が何を求められているかという、彰子様の家庭教師をしていて、これから後も源氏物語を書き続けるようにということも要求されている。それをしなければならぬが、それをパンパンとしてしまっただけでは、この人たちから怖がられる。そしてまた「紫式部って怖いよ、やっぱり本性をひけらかしたわね。」と言われ、皆に口を利いてもらえない。

でも今のように「さあ、わたくし、よくわかりませんの。」と言って波風立てないようにしつつ、しかし彰子様にこっそりと教える。自分の局、個室でこっそりと源氏物語を書いて、出来てから道長さまに見せる。つまり、世の中角が立たないようにやっていけば、仕事をしつつも、この方々と仲良くやっていくことができる、ここはそんな文化なのだということが初めてわかりました。

そこで紫式部が考えたのは、
「これぞ我が本性ともてならはす。」

このおいらかということ今、みんなから買いかぶられて、本性ではないが、皆からおっとりした人だと思われている、これを私の本当の性格ということにしましょう、そう練習しましょうと、これが自己陶冶です。自分の勤めた所の文化に合わせて、そこの人々に自分を馴染ませていく。そして、そこで自分自身が達成できる、自己実現できるように、そこに合った自分に変えていこうという努力を、紫式部はした

というのです。紫式部日記には、そのように私が努力している様子を見るにつけ、最初は一言も声を掛けてくれなかった彰子様、だんだん声を掛けてくれるようになった、と現在進行形で書いています。

定子というお后さまは、清少納言に「少納言よ、香炉峰の雪はいかに」などと、いちいち声を掛けて励ましたり、褒めたりしてくれる。定子は褒めて伸ばすタイプの人でした。しかし、彰子はぜんぜんタイプが違うのです。どちらかというところとジッと見ていて、頑張っているなどという様子が見えたら評価する。そういった女主人だったわけです。そして紫式部の努力がだんだん勝ちを得ることになったわけです。

②旧友達に対する疎外感…自分の生き場はどこ？覚悟を決める

旧友達というのは、主婦時代のお友達です。このお友達もまた同じように家にいる主婦、あるいは娘たちと思われませんが、紫式部はその人たちに對する疎外感、自分は、のけ者なんだという気持ちをやがて感じるようになったということです。

主婦と女房の常識の違い→友への引け目

紫式部がお勤めをするようになり、とても豪華な建物などに暮らすようになるわけです。御所や、あるいは藤原道長の豪邸に暮らすようになります。

ある時、雪の季節が近づきました。お腹に赤ちゃんがいた彰様は里帰りをして、道長の豪邸、お里で赤ちゃんを産みました。しばらくの間、紫式部もこの豪邸に住むこととなります。現在で言いますと、京都御所の東北の角あたり、京都御所の堀の内側のところです。今はちょうど迎賓館が建っている辺りだと言われていますが、そこに貴族の豪邸中の豪邸があった。大豪邸で、池あり梢あり遣り水あり、ちょろちょろとせせらぎが流れている。そうした幾棟もある豪邸を

道長が営んでおりました。そこへ紫式部は彰様が赤ちゃんを産む間、4ヶ月ぐらい滞在して、雪の近づく季節になりました。「ああ、いろいろな季節を見てきて、秋も良かった。初雪も素敵だろうな、この素敵な豪邸の初雪を見たいな。」と、思っていた頃、たまたま紫式部はお暇をいただき、自宅にちょっと帰るのです。自宅というのが現在の京都御所の堀の外側、廬山寺というお寺がありますが、そこだったと言われていません。現在は平安時代と比べて、地面そのものが2メートル上がっています。掘って見たら2メートル下に紫式部が暮らしていた敷地の後が出てくるというわけですが、位置的にはあの辺りです。ということは、現在の寺町通を隔てて、彰様が里帰りしていた大豪邸と紫式部の住んでいた自宅というのがお向かい同士だったということです。だから、ちょっと帰りますと言って自宅に帰ったわけです。

ところが、帰って2日あたりで初雪が降ってきました。やはり初雪というのは雪の中でも特別ですね。京都の初雪は空が青くて、松葉などが緑色で、そこにちらちらと初雪が降る。雪化粧が素敵です。「ああ、この雪をこんな自宅の、みすぼらしい見飽きた庭で見てしまった。あの豪邸の庭で見るのを楽しみにしてたのに。」と思った紫式部は気がつくのです。

「ちょっと前までこの庭でとても幸せに暮らしていたはずなのに。娘がいて、以前は夫も通って来てくれて、父もいてお友達もいて。この庭をみすぼらしいなんて思ったことがなかった。それなのに少しお勤めしたら、あの豪邸に慣れてしまった。私、変わってしまったんだ。」というわけです。

例えば自宅は日本家屋の築30年か40年。しかし、自分の勤めるオフィスは四条烏丸の素晴らしいビルにあるというOLの方は多いと思います。帰りには大丸でショッピングして帰るという人も多いと思います。でも自分の家は築30年、40年。いや、もちろん京都でしたら町家で百数十年という素敵なお家もあると思

いますが、自分の家は古い、ビルの方が素敵だという価値観です。紫式部はそういう価値観になってしまった自分に気づいた。

その時に、私はもう元に戻れるのだろうかという寂しさです。紫式部はとても自意識の強い人でした。自分の周りを見回した時に、自分でこんなに変わったと思うからには、ああ昔のお友達ももう私のことを受け入れてくれないかもしれない、ということです。

主婦と女房の常識の違い。主婦とは、まさに奥様ということです。奥様というのは家の奥にいます。一方召使いになった紫式部は、例えば宅配便がピンポンと来たら「ハイ」と出て行く仕事をしなければいけない。自分が家にいた時には貧乏貴族といえども奥様ですから、女房や召使いを使っておりまして、「あなた、取り次ぎに行きなさい」と言うと、「ハイ」と言って女房が行ってくれる。しかし、自分が彰子の女房になりましたら、自分が手紙でもなんでも取り次ぎに行かなくてははいけない。そうすると男性とも顔を合わせるわけです。

平安女性は、奥様はほとんど、身内以外の人と顔を合わせませんでした。姉妹や夫や子ども、そして自分の家に仕えている召使いと家の奥の方において、ちょっと言葉を交わす。そして大声も出さない。それだけ動きがないのが平安時代の奥様です。それが「紫式部さんてねえ、女房使いに出ちゃいましたって。あら、恥ずかしい。それじゃ、いろんな人と顔を合わせるわけね。いろんな人に顔を見せるなんて、なんて恥ずかしいのでしょうか。」

このように妻たちの常識から外れた恥ずかしいことをする人間になってしまった、と自分のことを思うのです。これはお友達から言われたわけではありません。でも、紫式部がちょっと自意識過剰なので、きっと皆からそう思われているというふうに引け目を感じてしまうのです。

女房への警戒心→互いに疎隔

これは紫式部がということではありません。

紫式部のことを少し知っている周りの主婦たちが、女房家業の人々への警戒心を持っているというのです。つまり、お手紙などを軽々に出すと、「ちょっと見せて」と、女房同士で回し読みされてしまう。だからプライバシーも秘密もあったものではないという警戒心です。

これを表す端的な一節が『枕草子』にあります。枕草子は清少納言が書いていますが、何々なもの、というコーナーがたくさんあります。美しきもの、あわれなるもの、その中に嬉しきものというコーナーがありました。「嬉しきもの、人の破り捨てたる文を接ぎて見るに」。受取人がビリビリにした手紙か、自分で書いてやめようと思って破り捨てたかはわかりませんが、清少納言は「あら、捨ててある。手紙だわ。」というわけで拾って繋ぎ合わせてみた。そして同じ続きを「あまたくだり見つけたる」。「ああ繋がる、繋がる」と喜んでいる清少納言が見えてくるようです。

このように女房勤めというものはプライバシーがないものでした。ですから「軽々しく紫式部さんに自分の心を打ち明けた手紙なんか出したら、『あそこの奥様はこんなことを思っているのよ。』というわけで知れ渡ってしまう」と。奥様の旦那様は公務員です。公務員というのは宮中にお仕えしているわけですから「あそこの人ね、あそこの旦那さんの奥さんね。」ということになるわけです。

つまり、現在の霞ヶ関、国家公務員のビルに勤めている男性の奥様の噂を、その国家公務員の同じビルに勤めている若い女性公務員たちがする。旦那さんはお勤め先で自分の奥さんの手紙の内容を知るということになって、これはプライバシーもあったもんじゃない。だから「紫式部には、もう手紙を出せないわ」と。

落ち着かぬ暮らし→連絡とれず

これも誰もが言っているわけじゃないのです。でも紫式部が、私はもうこんな世界に身を置いたので、友達からは警戒されているだろうなど

考えてしまう。そして紫式部は、今日は内裏、明日は彰子様のお里、また明後日は自分の自宅、あっちこっち落ち着かない暮らしです。彼女にどうやって手紙を出していいのか、今の住所はわからないから連絡がとれないわというわけで、自然にお友達からも手紙が絶えた。ああ私に今、よくお話をしてくれ、手紙も送ってくれるのは誰なんだろうかと自分の行き場を考えた時に、もう女房しかない。お勤めをしていて、今差し当たって顔を合わせ、悩みも打ち明け合い、明日はどうする？どんな着物を着る？そういうことも相談し合う目の前のお友達。この自分の女房家業というのが自分の行き場だ。やがて紫式部はそう覚悟を決めるようになっていくのです。

③職場・自己の立場の理解

…どのように必要とされているのか 道長の焦燥

覚悟が決まりますと、紫式部は周りを見回すようになります。先程少し申しましたが、藤原道長がスカウトしてくれたのです。道長様はいったいどうして私をスカウトしてくれたのか？

それは彰子様に子どもが生まれてほしいと思っているからだ。彰子様にどうして子どもが生まれないんだろうか？一条天皇がなかなか彰子様を可愛がってくださらないからだ。この時点で、彰子はすでに結婚して6、7年が経っています。結婚した時に彰子はまだ12歳。これは数え年ですから、現在でいうところの満年齢11歳。小学校5年生ぐらいでした。そんな時にまさか子どもを産めない。でも6、7年も経って、18、19にもなれば、当時の平安女性としては当然、子どもを産むことができる。しかし、彰子は子どもを産むどころか一度も懐妊、妊娠したことがなかった。ということは、一条天皇は亡くなった定子のことばかり思っていて、定子が死んだら彰子というふうには心が動かなかったことを表しています。ですから、彰子様に魅力をつけて一条天皇をふり向かせる。その

戦力として私は雇われたんだ。紫式部はそういった自分が要求されている仕事というものに気がつくようになるのです。

貴族たち、定子（枕草子）時代を懐旧

一方、道長の一族ではない藤原氏ですが、周りの貴族たちの中には、先程から申していますように、清少納言を雇い枕草子を書かせた定子という人物が亡くなって何年も経つのに、その人の時代を懐かしむ思いがまだ続いていました。「最近は気の利いた女房は少なくなった。」と言うのです。少なくなったということは、昔は居たということですよ。それではその昔とはいつなのか？定子様がいた頃だというわけです。貴族から聞いたこの一言を書き留める時に、紫式部の筆は非常に腹を立てているようです。私はそんな昔にはお勤めしていなかったから知りませんが、というような書き方をしています。確かに紫式部は定子が生きていた間にはお勤めしていないのです。したがって、定子の女房だった清少納言とも一度も敵味方同士として顔を合わせたことはありません。ですからよく皆さんがお考えになる大奥のように、向こうからこちらの派閥がやって来る、こちらからは側室の誰々様の一軍がやって来る。そして後ろにはたくさん腰元もついていて、二つがすれ違う時、バチバチバチッと火花が散るという、そういった時代はなかったのです。

定子と彰子という人は1年間だけ重なっています。でも実は、この人たちもバチバチッと火花を散らすような、はしたないことはなかった。それは定子を愛している一条天皇と、彰子を守らなくていけない父親の藤原道長が、二人がいくわしてつまらないイザコザが起こらないようにと、常に二人を別々の御殿に置いていたのです。彰子がお里にいる時に、定子が一条天皇の御所に来る。定子がお里に帰ると彰子がやって来る、というふうに互い違いなので、この二人がすれ違うということすらなかった。ましてや定子が亡くなって数年後にお勤めを開始した紫

式部には、定子時代のことはぜんぜん知りませんが、という具合でした。しかしながら周りの雰囲気はいつまでも定子様を懐旧するようでした。

皆様はダイアナ妃を覚えていらっしゃるでしょうか。もう亡くなって10年ほど経つのだそうです。しかし今年の夏でしたか、またダイアナ妃番組というのをやっていました。結婚式の思い出フィルムというのは、いつ見ても何メートルも繋がる素敵なベールできれいです。またスタイルが良くて華やかで、世界中を飛び回ってダイアナ妃外交というのを行っていた。彼女が生きていた間にはいろいろありましたが、イギリスの王室は華やかな雰囲気を世界中に振りまいていたのです。

定子もそういう人です。華やかで、そしてどちらかというと庶民的な、よく笑う人物でした。この人も生きていた間はいろいろありましたが、それでも亡くなるまで華やかで明るく笑うことを絶やさなかった人物です。そして、そのことを後々まで書き留めているのが枕草子です。

ですから紫式部は、枕草子を書いた清少納言が憎らしい。いつまでもダイアナ妃番組を続けているテレビ局のようなもので、ああ早くこんな番組はやめてほしいと。現在、チャールズ皇太子は奥さんがいらっしゃるのですよね。その方のスタッフはそう思っているだろうと思うのですが、そのスタッフのように現在、彰子を応援している紫式部としては、なんとかしないと、私が彰子様を盛り立てないと、そしてその一員として頑張ろうと、自分の役目を考えていくわけです。

彰子の孤独

紫式部がお勤めを始めて本当に感じるに至ったのは、このことだったと思います。結婚して6年も7年も経つのに夫にふり向いてもらえない。表だっては一番良い席を与えられ、それなりに夫は通っているのだろうが、結局妊娠しないということがすべてを表しているわけです。それ

に対して、父親からは子どもを産め、しかも男の子を産め、というプレッシャーを与えられ続けている。彰子はどんなにつらかったことでしょう。紫式部は道長にスカウトされたのですが、直属の上司はこの彰子なわけですし、女同士としてつらい気持ちもわかります。この人のために頑張ろうというのが、紫式部の女房として行き当たった使命感でした。

④自分にしかできないこと

…〈私〉を社会に生かす

紫式部がお勤めを始めて3年ほど経った頃、ようやく彰子は妊娠することができました。これが紫式部効果だったかどうかは私はわかりません。どちらかという、父親の藤原道長効果だったのではないかと考えています。というのは昨年度長が吉野山にお参りして千年という展覧会が博物館で行われたのを、皆様は覚えていらっしゃるでしょうか。藤原道長は吉野山・金峰山に登山をして、その一番上の蔵王権現というところにお参りをしたのです。これが西暦1007年のことです。8月に2週間ほど掛けてお参りをしています。これがとても面倒なお参りで、お参りする2ヶ月前から精進潔斎しなくては行けないのです。女性を遠ざける、お酒は飲まない。それどころか毎日毎日、家で庭に出て頭を地面に擦りつける。五体投地というやり方です。ひざまづいて膝をつく、頭をつける、そして直ってまた立ち上がる。膝について頭をつけて、また立つという体操のようなことを何百回も繰り返すのです。

それを数ヶ月続けた後、男性だけで吉野山に登る。女性は行けないのです。登る時には道長は貴族を引き連れて登った。そして登って一番最初にお参りした所が、吉野山の頂上の子守三所という所です。これはおそらく一条天皇に対して、神様仏様の御利益ということ以上に、直接のパフォーマンスになったと私は思うのです。道長がこんなことをしてまで、うちの娘と子ども

もを作ってくれという、神頼み仏頼みでありませ、という手に出たわけです。

一条天皇は独裁政治を執っているわけではなく、また道長も独裁政治を執っているわけではなかった。この頃の政治は一条天皇が道長と相談しつつ、道長が貴族を束ねて協調的にやっています。

二人はお互いに欠かすことのない政治的名パートナーですから、道長のご機嫌を損ねてはならないわけです。天皇は「そうか、道長はそんなに彰子に子どもを作ってほしいのなら、まあ、男でも女でも構わない、一人作っておこうか。」8月にこのお参りが行われまして、1月には彰子の懐妊が明らかになります。

漢文進講

さて、この少し後の5月に、私にしか出来ないことだと思って、紫式部がしたことです。彰子様に漢文の勉強を教える、講義をするということでした。

「宮の、御前にて文集のところどころ読ませたまひなどして、さるさまのこと知しろしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬものひまひまに、をととしの夏ごろより、楽府」

楽しいという字に、京都府の府と書きまして「がふ」と読みますが、

「楽府という書二巻をぞ、しどけながら、教へたて聞こえさせてはべる、隠しはべり。」

中宮様は差し向かいで私に『白詩文集』のところどころを読ませたりなさいませ。白詩文集の白詩というのは中国の漢文あるいは漢詩の名人・白楽天という人物。その人の漢詩と文書を集めたものが白詩文集です。「はくしもんじゅう」とお習いになった方もたくさんいらっしゃると思いますが、近年の研究で、平安時代にはそう読まれていた証拠がないということがようやくはっきりしました。そこでここでは「はくしぶんしゅう」と読ませていただきます。

ところが、中宮・彰子様はこの白詩文集が読

めないのです。これは屏風などに書かれて御所の所々に置かれていて「紫式部、これ何て読むの？」というわけです。紫式部は、彰子様は漢文方面のことを知りたげでいらっしやるとピンときまして、それならお教えいたしましよと、屏風などではないテキストをきちんと用意して教えます。しかし、その時に極力人目を忍び、他の女房が誰もお傍に控えていない合間合間に教えた。というのは当時は、漢文というのは男性のものでしたから、女性が漢文をやるなんて、という感じです。

例えば、大学に行くのものはしたくない、短大でいいわよ。というのが昭和の40年代、50年代ぐらいまであったかと思ひます。私が教員をしておりましては平成になる頃でしたが、その頃、保護者の方々と面談をしますと、「いえいえうちの子は事務職で、やがて結婚をさせませので、短大で結構です。」あるいは「高校を出てすぐにお勤めします。」という人も多くいらっしやいました。それどころか私が大学を出た頃というのは、家事手伝いとして一度も就職をしないままそれぞれ自分の家の仕事などを手伝いつつ結婚していく。つまり女性に社会参加や、あるいは難しすぎる教養は必要ないという時代は、千年前から昭和まで続いたわけですね。

そんなわけで、漢文というのは平安の最高の教養でしたが、女性は身につけない方がいいと。でも、定子様は身につけていたではありませんか。「香炉峰の雪はいかに」というのは、まさに白詩文集の一言です。あの人は特別でした。お母さんが国家公務員として、キャリアウーマンでならした人物でした。国家公務員の女性は漢文を読む必要があります。というのは国家公務員として読む書類は、皆漢文で書いてあるからです。そういった母親を持っていた定子は漢文を知っていた本当に珍しいお后でした。でも、道長によって后中の后として育てられた彰子は女に勉強は要らぬということで、和歌の教育は受けていましたが、また平仮名の筆は上手に書けたでしょうが、漢文は知りませませんでした。

でもここで突然「これ、何て読むの？」と、漢字ばかりの屏風を指さして言い出したのです。それで紫式部は、そうかこの方は漢文を知りたいと思ってらっしゃるのだ。でも、これが勉強していると知られると、紫式部って才女で鼻持ちならないのよって噂がまたぶり返す。また彰子様もよくない噂を立てられるかもしれない。それなら秘密にいたしましょうと、女房が見ていない時を見計らって教えたのです。

寛弘5年、1008年です。ちょうど今から千年前の夏頃からです。彰子のお腹には赤ちゃんがいた頃です。ですからきっとこれは実家に里帰りして、気心の知れた女房しかいなくなる頃に、隠れて勉強を教えたのだと思いますが、白楽天の『新楽府』という書物二巻。きちんとではありませんがと、このあたりは紫式部の謙遜です。こっそりとお教えしています。あくまでも自分は角を立てず、おっとりと人に隠れて自分の能力を必要とところにだけ明かすのだという姿勢です。

さて、なぜ彰子はこんな時に漢文を読みたいと思ったのでしょうか。私には長くわかりませんでした。彰子は定子の真似をしたいと、今さらながら対抗したいと思っているのかと思いつけていました。しかしつい1、2年ほど前、フツと思いがたったことがありました。それがこの「新楽府といふ書二巻」という紫式部が選んだテキストです。

先程定子様が「香炉峰の雪はいかに」と言う詩を知っていたと申しました。これは詩人が布団の中に入っているのだが、まだ眠い。「布団の外は冬で寒いし、香炉峰の雪景色を見たいが、こうやってそこの窓の所まで行って御簾を上げるのが面倒くさいし、寒い。だからお布団の中にいて、ちょっと手を出してポンと開けて、カーテンの下から見よ。」と惰眠を貪っているという詩です。これは香炉峰の下に自分の庵を作ったという長閑な詩です。こういう詩は非常に好まれていました。女性である定子も読んでいました。

ところがこの『新楽府』というのは、ぜんぜん趣が違います。「税金が高い。それはどうすればよろしいでしょうか。」そんな詩です。とてもお堅い政治のやり方を書いた詩です。中国の皇居の中の市場に物が全部集中して、一般の人々の市場には物が少ない。だから一般の市場では価格が高騰している。このような事態をどうすればよいか。皇帝は自分のところに物を集中させず、一般の市場に放出すればよい。政治問題、経済問題、要するに世の政に関わり皇帝が知るべきこと、それを詩人が書いたものです。

これは詩人が、「自分の政治の詩がヒットするといいな、そして皆がこれを口ずさむといいな、そうするとやがて皇帝の役人が市中を回って、『おや税金が高いという詩が流行っていますよ』『おや経済状態が悪いつて詩が流行っていますよ』』と言って皇帝の耳に入れる。皇帝が『そうか、じゃ反省しよう。』というわけで政治を直してくれる。そのことを目論んで作った詩です」とハッキリ書いているものです。ですから現在でいうとフォークソング、戦争をやめよう、あるいは環境を良くしようなど、そういったメッセージソングです。

これはお堅い中のお堅い詩で、これを女性が学ぶということはない。なぜかというときに思い当たったことがありました。私が勉強を始めた頃に、当時の日本の貴族たちが作った漢詩というのを勉強した時期がありました。その時に一条天皇の詩を勉強したのですが、こういうことを言っています。「みんな、世の中の政治や経済のことを教えてくれ。みんなの作った詩によって、僕はそれを知ろう。」そして一条天皇はこの『新楽府』という白詩文集の中でも二つの巻を自分の愛読書にしていたのです。

私が思い当たったのは、たぶん彰子は一条天皇に近づきたいと思って、漢文を勉強したいと言い出したのだということです。紫式部日記を読みますと、この直前に一条天皇が源氏物語を読んだと書いてあります。そしてその感想として、「この作者はなかなかたいしたもんだ。漢

文の素養があるね。」と言ったと書いてあります。彰子はそれを聞いたのでしょう。漢文の世界は定子様と一条天皇の世界であって、私には到底近づきたい世界だと思っていた。ところが源氏物語の作者と言え、私の所の紫式部じゃない。紫式部がその世界のことをよく知っているというなら、その世界のことを知りたい。そういう思いで「あの漢文何て読むの？」と言ったのではないか。紫式部もそれにピンときた。

というのは、内裏で一条天皇が紫式部は漢文の素養があるね、と言ったことが噂になっていたからだと思います。「ああそうか、彰子様は漢文が読みたいと仰るのは、一条天皇に近づきたいからなのだ。それなら私は一条天皇が大好きな詩がわかる。」なぜそんなことを紫式部は知っていたのでしょうか。それも証拠があるのです。というのは先程悪口をずっと言っていました紫式部の生活力のない父親です。この人が漢文の学者です。それで一条天皇と、この前詩の会に出た。天皇はこういう詩がお好みだよ。そういうことを紫式部に小さい頃から伝えていた。それを判明させるような資料も残っていません。

ですから、紫式部は彰子が知りたいのは「香炉峰の雪は如何に」ではない。ダイレクトに一条天皇に繋がる詩として、この教科書『新楽府』を彰子に教えた。そして彰子は一昨年から勉強しているというのですから、ある一時期だけを勉強して「難しい。」と投げ出したのではないのです。今これを書いているのは寛弘7年。2年後ですから、2年間もコツコツと経済がどうだ、政治がどうだという難しい詩を勉強して今に至るというわけです。

紫式部は彰子の何よりの願いである、夫の閉ざされた心に寄り添いたいという願いを理解し、そこで私にしか出来ない、漢文を教えるという特技を活かした。つまり漢文進講ということをした。そして彰子もそれにならって一生懸命勉強しているということが、ここから伝わってくるわけです。ちなみに、藤原道長もこのことを

知った。彼にとっても娘と夫がますます仲良くなることは、どんどん自分の政治的な達成に繋がるわけで嬉しいのです。「そうか、よし。」というわけで、次から次へと財力を傾けまして、御本を素晴らしく仕立てて中宮様にいただきました、と言っています。

源氏物語書き継ぎ・新本制作

その次に、源氏物語です。私にしか出来ないこと。まさに源氏物語を書くことは紫式部にしか出来ません。この時は、彰子は赤ちゃんを産んだ後です。産むまで本当に怖かったと思います。彼女は結婚して足かけ10年です。丸9年経って懐妊して、そして9月に赤ちゃんを産むのですが、女の子ではいけないわけです。道長などは、お腹の赤ちゃんがもし女の子でもお腹の中で男に変わるようにという仏教の秘法をさせているくらいです。これで女で生まれてきたら、どれだけ立つ瀬がないことか。

後々ですが、彰子の妹が皇室に嫁いでいて赤ちゃんを産んだのですが、女の子だったということがありました。道長は本当にゲンキンな人です。がっくりきて「おめでとうございました」と挨拶に来る貴族たちに、「ありがとう」と言うこともなく奥に引っ込んでいたということです。そうなったらつらいのは娘の方ですよ。彰子は男の子が生まれるかどうかヒヤヒヤだったと思うのですが、めでたく男の子でした。

たぶん彰子はこの子が生まれる前に漢文の勉強を始めた。その辺りから少しずつ自分で努力するという前向きな気持ちになり始めたのだと思います。この人は定子と違って、ちょっと性格的に地味なところがあるのです。定子はパッと華やかでしたが、自分の心を抑え、出来るだけ目立たないようにするのが上品だという価値観を持っている人です。でも、一条天皇に寄り添いたい。そして生まれたのが男の子だったということは、自分にとってどれだけ自信になったのでしょうか。

そして彰子は内裏に帰ることになりました。

里帰りから天皇が待っている所に子どもを連れて帰ります。その時にとっても忙しい時期だというのに急に思い立って「紫式部、本を作りなさい。」と言いだしたというのです。紫式部が原稿を用意していることから考えても、源氏物語に違いないと、現在定説になっています。

時間も迫ってまいりましたので、ここは訳の方を読ませていただきますが、「中宮様のお内裏へのお帰りが近づき、女房たちはその準備続きで急がしい、慌ただしいというのに、中宮様は御本作りをなさるといふ。そこで夜が明けると真っ先に中宮様の御前にあがる。そして差し向かいで作業にあたる。」

彰子は座って待っています。そうすると、「遅くなりました。」と言ってバタバタと局から紫式部がやって来る。二人で差し向かいになって、「では、今日の作業をいくわよ。」と。何をしたのかと申しますと、色とりどりの紙を選び整える。豪華本です。ただの白色の紙に書いただけではつまらないので、きれいな紙を選び整えて、「では、この紙に書いてもらいましょう。」と、紫式部が持ってきた物語の原稿を添えます。紫式部が書いた筆の字ではつまらないのです。当代の名筆、能書に清書を依頼するというわけで、世界に一冊しかない豪華本が出来上がる。

この頃本は宝物です。皆様は本が印刷されないということ、印刷技術がないからだと思われるかもしれませんが、そうではありません。日本には平安時代、すでに優れた印刷技術がありました。現在でもお宝鑑定団などで、素敵な絵が自分の家の納戸から出てきましたと言って見せると「ああ、これは印刷です。」などいって2千円などになることがありますよね。要するに印刷は大量生産である。だから、大量生産がほしいとなった江戸時代になって発展するわけです。技術はあっても大量生産向き、つまりお寺などで大量の写経をする時に、印刷経ということで用いられていた技術でした。

では物語はというと、それぞれの家で丹精込めて、一点物として作られる宝物でした。です

からこのように、清書は能書の人に頼んだわけです。原稿は能書の人が自分の所に持っておきつつ、書いたきれいな字の清書の紙が届く。そしてその分を綴じ集めて一冊の本にする。

その本が幾つあったかはわかりません。ともあれ紫式部はこの係にあたり、これを仕事にして夜を明かし日を暮らす。彰子も一生懸命にこの仕事にあたっています。一枚の敷物の上で、冷たいのに産後2ヶ月ぐらいの人が、朝から晩まで紫式部と差し向かいで仕事をしています。父親の道長がやって来て、とても心配しています。

「いったいどんな子持ちが冷たいのにこんなことをするのか」と言いながら、彼はまた財力で応援です。上等の紙、硯、筆まで持って行って、応援する。彼はいつもお金で応援する、物で応援するしかないわけです。

でも、どうしてここまで応援するのかというと、この本が内裏で待っている一条天皇へのプレゼントであったからです。自分の娘と天皇を繋ぐ、そしてまた年子で次々男の子を産ませてくれるとっかかりになるようなものだったら、なんでも応援しますというのが道長です。というわけで、道長も応援するこの源氏物語の新本の制作に一心に彰子もあたり、紫式部も中心的なスタッフとして差配するというわけです。

この本を内裏に持って行って、たぶん彰子はとても効果的に使ったのだと思います。私はこれを一条天皇へのプレゼントだと思っていたのですが、別の研究者の方と話をしていましたら「これは彼を引き寄せるのよ。」と仰いました。その通りだと思います。つまり「はい、プレゼントです。」と言ってあげるのではダメです。一条天皇が源氏物語を好きだったというのは、この前の漢文進講のところですのでわかっています。彼を惹きつけることができる源氏物語の新しい部分「お読みになったことのない部分を紫式部に書かせました。どうぞ、読みに来てください。」というわけです。ここにありますから見に来てくださいと言って、彼を呼ぶ。読みたさに一条天皇がやって来る。彰子はこの作業

の中で全部読んでいますから、「ああ、そちらをお読みですか。どういうご感想をお持ちですか。」と彼が言うと、「わたくしはね。」と、こういうふうに言葉が弾みますよね。それで今までどちらかという一条天皇も亡くなった人を思って冷たく心を閉ざし、孤独にいた。その心が一つの物語という話題で解けてきて、本当の夫婦になっていく、そういう場面を源氏物語は仲立ちしたのだと、私は思います。

こうして紫式部は自分にしか出来ないことで、自分の役割を果たした。つまり、自分が応援した彰子のせつない気持ちを実現させ、彼女を一条天皇と結びつけることが出来たわけです。

源氏物語は実は当時サブカルチャーでして、現在のマンガやゲームなどのような文芸作品として、第一ではない地位しか与えられていませんでした。私たちが、今紫式部という思い浮かべる「世界の偉人」というような存在では、ありませんでした。

ですから紫式部が「天皇に読ませたいから源氏物語を書いて」と彰子様に言われた時には、皇后陛下から「天皇陛下にさせたいからゲームを作って」「マンガを描いて」と言われるように、ちょっと戸惑ったかもしれません。しかし、自分に出来ることをやろうと思ってやった。それが目の前の皇后の役に立ったばかりか、やがて気がついてみると、平安時代を代表する作品になっていた。

それは一心に作ったからです。自分の実力を全部注いで一生懸命に作った。それがやがてこの時代を代表する文化になった。そして、千年後まで様々な人のニーズに応え、私たちにも読み応えのある作品になったというわけです。

私たちも、それぞれに何になろうと思わなくても出来ることがあると思います。その出来ることを貫いていったら、いつの間にか自分のしたことが世の中の役に立っていた、その代表が紫式部だと思うのです。

紫の上の言葉

さて最後に、これは千年前の紫式部から皆様へのメッセージだと思って、少し哀しいメッセージだと思いますが読ませていただきます。これは源氏物語の中で、光源氏に一生連れ添った紫の上というヒロインが亡くなる前の年に言うことです。彼女は源氏に育てられ、子どもの時から愛されて、30年以上。しかし、女というのはいろいろなものを見ることも、聞くことも制限され、言うことも制限されて、女として生きること何とつらいことなんだろうか、と最後に思い至ります。その時の一節です。

「女ばかり、身をもてなすさまもところ狭う、あはれなるべきものはなし」

ここから訳の方を読ませていただきますが、「女ほど生き方が窮屈で哀れなものはない。心を震わせる感動も素敵体験も見知らず、大人しく家に引きこもっていなさい。」と言われるわけです。「そうしているけれど、そんなことではどうして人生を生きる喜びが味わえよう。寂しい時に心が慰められようか。」それから、自分の表現です。「物事の善悪判断がつくのには口に出さず心に埋もれさせてしまう。私にはわかりませんというように、生意気な顔をしないようにと、じっと心に抑えている。それもどうしようもない。自分の心ながら、これで幸福に生き切れるとは思えないわ。」紫の上は思いを巡らせました。そして、それについて源氏物語の文章は、これは暮れかかった人生のためではなく、ただ孫娘の一宮の人生を思っただけだと書いています。

これは紫式部自身のメッセージだと、本居宣長が書いていますが、私もそうだと思います。少し前までのことかもしれませんが、女性というのはいろいろな所にしゃしゃり出て行って体験したり、あるいは私は知っていますよと言って、自分の表現できることをしたりすると、生意気だと思われ、抑えていたり、制限したりするということが良い生き方だと思われていた。

でも、そうではないんだ。いきいきと様々な体験し、自分を表現してこそその人生なんだ。次

の時代はそう生きてほしい、と紫式部は思った。
それで千年前の源氏物語の中で、私たちにこの
メッセージを投げかけてくれたのだと思います。

今日は人生の先輩方もたくさんいらっしゃる
所で、私こそ生意気な話を申し上げまして、大
変僭越なことでありました。しかし私の口を借
りまして、紫式部が自分の一生のことを言い、
またメッセージを語りかけたというふうに思っ
てください。長い時間になりましたが、ひとま
ず今日は本当にありがとうございました。

質疑応答

(山本) それでは、途中で申し上げましたけれ
ども、千年紀ということで、源氏物語、紫式部
について、いろいろご質問などお持ちの方もい
らっしゃると思います。今日のお話に限りませ
ず、何かご質問がありましたら、どうぞお気軽
にお手をお上げくださいませ、どうぞ。

(司会) 会場の皆様の方で、山本先生に聞いて
みたいことなど、質問はありませんでしょうか。

(山本) 真ん中の方がお手をお挙げになりました。

(司会) 真ん中の方、お願いします。

(質問) 失礼します。大変良いお話をお伺いし
まして、いろいろ自分が思っていたこと、また
この前、石山寺の方でありました所に行って、
いろんなことを学んだ上で、また今日聞かせて
いただきまして、大変嬉しく思います。

先だって大宮町の方へ行かしていただきました。
その時に、大宮町の五十河という所なんです
が、小町のロマンのというのがあったんです。

終焉の地というのがあったりするんですが、
この紫式部はどこが終焉の地になっているんで
しょう？ やはりこの京の都の中でしたでしょ
うか？

(山本) 紫式部が亡くなった場所ということで

すね。

(質問) はい。

(山本) 先程、紫式部が生まれて暮らしていた
家ということを申しましたが、おそらくその家
で晩年を過ごしたと思います。生まれて暮らし
た家というのは、彼女の曾祖父が作った築100
年以上の家。京都の寺町通が当時の東京極通と
申しまして、住宅外が一番東の外れです。そこ
から一つ通りを隔てた外側にありました。豪邸
とはいえ、築100年で、当時は郊外に当たる
所です。

紫式部はその曾祖父の代までは政治のトップ
クラスの家柄だったのですが、その一代後、祖
父の時代からはもう受領クラスで、自分では土
地、建物が用立てられないような階級になりま
した。ですから先祖代々引き受けたそこに、一
族郎党で分け合って住んでいたと思われるんで
す。

紫式部集を見ますと、最晩年のところで、自
分の自宅で雪を見たという歌があるのです。こ
れがまた古ぼけた家だということですので、お
そらくその自宅に戻って、宮仕えを引退して静
かな晩年を迎えたのだと思います。この最後の
歌をちょっと申し上げておきますと、

ふればかく うきのみまきる 世を知らで
荒れたる庭に 積る初雪

生きながらえば、こんなにつらいことばかり
の世の中です。そういう現実も知らないで、あ
あ、初雪が真っ白に降ってきた、この荒れたる
庭に降ってきた。つまりこれは人生という庭に
降り立った少女時代の自分のことを表している
のです。長らく生きてきて、いろんなつらいこ
ともあった。でも、私はそんなことはぜんぜん
思わないで、無垢な真っ白な自分としてこの庭
に生きていたんだな、と思って振り返る。でも、
つらいことばかりではない、これからも生き続
けるという歌が、その後の最後の歌です。

いづくとも 身をやるかたの 知られねば
うしと見つつも ながらふるかな
どこに行ったらって、ほんとに100パーセン

ト気が晴れることなんかありませんよ。ですから、つらいのは当たり前。私はどっこい、これからも生きながらえることですよ、というのが、最後に彼女が至った境地であったようです。それでよろしいでしょうか。ご質問ありがとうございました。

(司会) 他にご質問のある方、ありませんでしょうか。

(山本) 真ん中の方が、ご質問です。

(司会) お願いいたします。

(質問) 彰子は、定子をどういうふうに見ていたか。定子は彰子をどう見ていたかと。それぞれがそれぞれをどう見ていたかについて、教えていただければと思います。

(山本) ありがとうございます。実はその資料がないんです。彰子はこう思ったとか、定子の手記とか、そういうものがあれば本当に見てみたいのですが、ありません。しかし、私は彰子は亡くなった定子をライバル視してはいなかったと思います。

私たちはライバルだったというふうに思いがちなのですが、定子は子どもを3人残しているんです。そのうちの男の子を、この子がまだ赤ちゃんのうちに彰子が引き取っているのです。彰子はまだ14歳。そしてこの赤ちゃんが今でいうところの1歳ぐらいの時に、定子が亡くなってしまって、いつまでもその子を定子の一族に預けておくわけにいかないというので、道長が、「お前、育てろ。」と言うんです。道長は彰子がこの赤ちゃんを心から可愛がるとは思っていません。策略上、彰子が一生子どもを産めなかった場合、この子が跡継ぎになるしかないというわけで、跡継ぎの養い親という立場を与えたのだと思います。

このあたりも道長は巧妙なんです。でも、彼は思ってもみなかったと思うのですが、彰子はこの男の子を、血が繋がらないけれども自分の子ども、あるいは弟として愛するようになっていくのです。ですから、その子の母親である定子のことも、亡くなった気の毒なお后様だけ

ども、自分のライバルだと憎んだりしなかったと思います。

どれだけこの男の子を彰子が愛したかというのは、この子がまた悲しい子で20歳で亡くなってしまいますのですけれど、亡くなる前に1人女の子を残していきました。この女の子を彰子は自分の息子のお嫁さんに行っているのです。嫌いな人の血が繋がっていると思ったら、息子のお嫁さんにすることはないと思います。でも、彰子が自分から言い出して、あの子の血を継いだ娘を自分の息子のところに嫁入りさせてくれというのです。ですから、彰子は定子をライバル視して憎んだりしてはしていなかったと、私はそこから推測しております。いかがでしょうか。

(司会) ありがとうございます。お時間の関係もありますので、もうお一方ぐらいありましたら。よろしいでしょうか？

(山本) 奥の方の方が手をお挙げになりました。

(司会) お願いします。

(質問) どうも素敵な話をありがとうございました。一つだけ。式部が宿下がりしますよね。それほど長い期間、彰子のもとを勤めてなかったと思うんですけれども、そのへんの理由は何だったんでしょうか。

(山本) 宿下がりとは仰いますのは。

(質問) つまり家庭教師をやめて。

(山本) お勤めをしている時にも時々、暇をもらって一週間帰るとか、1ヶ月戻るとか、そういうこともあります。引退するということがありますが、これがまたいつなのかがよくわからないのです。歴史資料に紫式部の姿が現れるのは1回。これは彰子の息子が天皇になった時に、貴族との間でちゃんと受け答えする最前線の女房として現われます。これが今お話しました、彰子が赤ちゃんを産む時の10年ほどの後のこと。それからしばらく後も同じ貴族との受け答えにしっかりした女房が出てくる。これはたぶん紫式部だろうと言われております。

これらの学者の説によりますと、紫式部は1019年ぐらいまではお勤めをしていたであ

ろうというのですが、その後のことは証拠がありませんので、私たちは推測して、ここからはもう引退して家に帰ったのだろうかとか、それとも、どうなんだろうか、と。それはこれから先、研究を続けてまいりたいと思いますが、今のところはそういうことでお許しいただけますでしょうか。ありがとうございました。